地域総合

タウン記者がたどる
継承ストーリー
つなぐものがたり
■41

古本と人つなぎ116年

古書専門「金木書店」（浦和区）

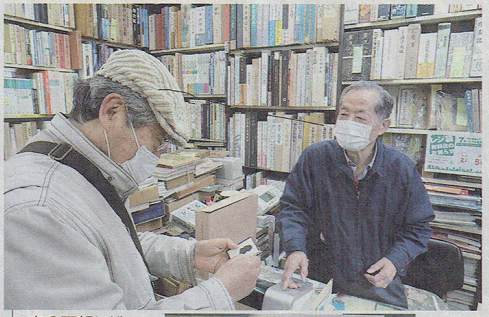
JR浦和駅と北浦和駅の半ば、中山道沿いにある古書専門「金木（かねき）書店」。都内で創業し116年、同地に移転してからも90年余り。3代目店主の金木好夫さん（65）は古本と人をつなげてきた。「魅力ある本との出合いにワクワクできる街の小さな古書店を目指している」と語る。

木箱に入った値段均一本などが置かれた店先から店内に入ると、埼玉の郷土史、文学など人文系の古書がずらっし並ぶ。客の多くが中年以上の男性で、毎日のように訪れる人もいる。最近は親子連れが絵本を買いに来たり、地方からネットで購入する人もいるという。

買つのはいつも古書というさいたま市桜区の飯沼博之さん（85）は「囲碁の本をよく買う。話題になっていた手のひらサイズの豆本があるかなと足を運んだ」。好夫さんは「新書と違って古書は一期一会の買い物。来店回数を増やし、気に入った本と出合う機会を楽しむ趣がある」と話す。

1905（明治38）年、千葉県安房勝山出身の祖父芳蔵さんが25歳の時、東京神田の北神保町で創業したのが始まり。芳蔵さんは19（大正8）年に40歳で逝去。関東大震災後に、祖母が岩槻出身という縁で現在地に移ってきた。店の向かいには市指定史跡「浦和宿」・七市場跡」の石碑があり、かつて中心地であったことがうかがえる。

祖母と伯母がしばらく切り盛りした後、父竹次郎さん（享年87歳）が2代目となった。当時は本が少なく、一冊の本を仕入れるのも大変だったという。竹次郎さんは店の裏や自分の部屋いっぱいに積み上げた本を大事に扱っていた。「幼い頃は食事中でもお客さんが来ると、父は席を立つので商売は大変だなと思った」と好夫さん。



客の要望に沿って店内にある本を紹介する好夫さん（右）

創業100年を超える古書店を切り盛りする3代目好夫さん（左）と愛子さん夫妻＝さいたま市浦和区

好夫さんは大学卒業後、2年4月の会社勤めを経て、家業を手伝い始めた。当時は古書業界も景気がよく、浦和や北浦和界隈に10軒近くの古書店があった。

「昔は多少景気が悪くても本だけは売れた。この辺りの学校に通う学生が立ち寄る店舗だけでなく、古本市など即売展も頻繁に催され、大忙しだった」と振り返る。

竹次郎さんが95（平成7）年に脳梗塞になったため、愛子さんが店番をするようになった。「それまで一切関わらずにいたので最初は消極的でした。社会人となった息子が小学生だった頃、ビーチボールにマジックで自分の住所と名前を書き、横に（古本屋）と書き足してあるのを見て、親の仕事を認めてくれていると勇気づけられた」と愛子さん。そのビーチボールは今も大事にしている。

愛子さんは現在、「ネット販売」も実施。また「金木書店だより」という小冊子も発行している。「市民の手で街を活性化しよう」と、82（昭和57）年11月から毎月、浦和駅西口のさくら草通りで開催されている「古本いち」にも出店。県内5店の古書店が参加する関東唯一の青空市。今月も22～25日まで開催する。午前10時～午後6時（雨天時中断）。

（タウン記者・俵操子）

【メモ】さいたま市浦和区常盤1の3の19。午前10時半～午後7時。水曜日定休。☎048・831・9258。出張買い取りもしている。

本社
編集局
さいたま市北区吉野町2-282-3
TEL 048-795-9161
FAX 048-653-9040
✉ dokusya@saitama-np.co.jp
広告のご用命 TEL 048-795-9932

熊谷市　秩父市　さいたま市　川越市　春日部市